

横山茂雄 編著 / 岩田託子・大久保護・  
小宮彩加・武井暁子・南直人 著

『危ない食卓——  
十九世紀イギリス文学にみる食と毒』



『危ない食卓』という魅惑的なタイトルを持つ本書は、2006年度日本英文学会全国大会のシンポジウムの一つ「十九世紀イギリス小説に潜む〈食〉の諸相」をベースに編まれた論集である。タイトルを見れば分かる通り食の暗い面、危険な部分である「毒」を焦点として編集されている。

魅惑的なのはタイトルだけではない。本書の構成も同様に魅惑的だ。大久保護・南直人・横山茂雄の三氏による近代イギリスの食をめぐる軽快な鼎談が第一部を占める。「イギリスに文学にみる〈危ない食卓〉」と題された第二部では、五人の研究者の独立した論文が収められている。昨今の日本でも話題となった食品偽装問題をセンセーション・ノベルに重ねて論じる大久保論文、危ない食卓でも特に危険視された酒を「禁酒運動」という視点からエリオットの小説とともに論じる岩田論文、十九世紀に命名される「拒食症」という危険な食の病をジェイ

ン・オースティンの小説の登場人物に見出す武井論文、十九世紀イギリスが、イギリスの国民性を代表するロースト・ビーフ（肉食）に危険な視線を向けた菜食主義者の世紀でもあったことを論じる小宮論文、歴史学の立場からヨーロッパ全体の食の近代化を概観し、他の四つの論文の参照枠となる南論文。食品偽装と毒、酒と禁酒、拒食症、ヴェジタリアニズムといった今日の私たちにとってもアクチュアルな問題が取り上げられている。第三部では、第二部の論考で言及された四つの主要な一次資料が翻訳されている。食品偽装に警鐘を鳴らした最初の一人であるフリードリッヒ・アッカムの食品偽装についての論考、禁酒運動の初期のリーダーであるジョゼフ・リヴジーの「麦酒講演」、「神経性食欲不振症」(anorexia nervosa) という専門用語を創出し現代的な拒食症患者を記録したウィリアム・ガルの論文、マハトマ・ガンジーを菜食主義へと向かわせたヘンリー・ソールトの「菜食主義擁護論」の四つである。それぞれの文章の後には訳者による改題が付記されている。最後に付録として日本語で読める参考文献が四頁にわたって記されている。サービス心旺盛である。

とはいえ、魅惑的なのはここまでかもしれない。そう感じさせる難点が編集、構成、狙い、想定読者といったベーシックな面において見られるからだ。詳しく論じるスペースがないので大きな点だけを挙げておく。第一部を丸々占領する長い鼎談は、ひいき目に見ても成功しているとは思えない。鼎談形式は、タイムリーなイシューを取り上げる特集雑誌の導入としては効果的といえるが、専門性を抛り所とする研究書において同様の効果をあげることは難しい。せっかく「十九世紀イギリス文学にみる食と毒」という煽動的なテーマを設定したのだから

ら、鼎談という安易な形式に頼らずに、時間をかけてこのテーマの導入となる入念で分かりやすい概論を提示するのが真摯な研究者の姿勢ではないだろうか。また、編集におけるアンバランスさが目立つ。例えば、第二部は「イギリス文学にみる」と題されているのに南論文はイギリス文学を論じてはいない。そもそもドイツ研究者である南氏がこの論集において大きな役割を担っていること自体が、この論集のアンバランスさを端的に示している。本書の狙いとして食品偽装など現代日本にもつながるアクチュアルな食の問題が取り上げられているが、あまりに現代に引きつけられてはいないだろうか。例えば、本書の争点の一つである「食品偽装」は *adulteration* の訳語だが、そのニュアンスを適切に表現しているとはいえない。大久保論文で分かるように、真／偽という軸よりも純／不純（混合）という軸の方が大きいのである。最後に、この論集の想定読者が絞り切れていないように見える。鼎談形式からしてより広い一般読者に向けて書かれているようだが、ジョージ・エリオットやアン・ブロンテに注釈が必要な一般読者に、(失礼ながら)マイナーな出版社から出されたこの手の専門書が届く可能性は極めて低いのではないだろうか。第二部の論文は、そうした一般読者を意識するが故に、また、アクチュアルな問題意識に引きずられているが故に中途半端なものになっているのではないだろうか。魅惑的な顔をもちつつも本書は、現在の出版マーケットにおける専門書の苦境を映し出しているのかもしれない。

なお、『身体文化論』(287頁)は『身体医文化論』、「本書第二部の鼎談」(293頁)は「本書第一部の鼎談」の誤りである。(新人物往来社、2008年12月、四六判300頁、2,000円)

——石塚 久郎 (専修大学准教授)